

福音のヒント 四旬節第2主日 (2018/2/25 マルコ9章2-10節)

教会暦と聖書の流れ

四旬節に「主の変容」の箇所が読まれるのは、教会の古い伝統です。山の上でのイエスの栄光の姿は、イエスが受難と死をとおって受けることになる栄光の姿が前もって弟子たちに現されたのだと考えられてきました。この日の福音の中に、「イエスの受難・死・復活にあずかる」という四旬節の大きなテーマが示されています。

四旬節には、「洗礼志願者の準備」、「回心」とその具体的な表れとしての「祈り・節制・愛の行い」など、さまざまなテーマがありますが、そのすべてはきょうの福音のテーマ「イエスの受難・死・復活にあずかること」につながっています。

福音のヒント

(1) この「高い山」とはどこのことでしょうか。伝統的にはガリラヤ地方エズレル平原にあるタボル山だとされています。平野の中にお椀を伏せたような形で、標高は558メートルです。それほど高い山とは言えないでしょう。もう一つの可能性は、「ヘルモン山」です。こちらは2,800メートル級の山々で、現在ではスキー場もあるそうです(写真は1月のヘルモン山)。マルコ福音書のこの箇所の直前



Photo by J.K.Koda

に出てくる地名は「フィリポ・カイサリア地方」です(8章27節)。フィリポ・カイサリアとヘルモン山はそう遠くありません。きょうの箇所は「六日の後」という言葉で始まり、前の話とのつながりを感じさせますので、ヘルモン山だと考えてもよいかもしれません。

(2) 直前の箇所は、8章の、いわゆるペトロの信仰告白と最初の受難予告です。

「31 それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。32a しかも、そのことをはっきりとお話しになった。32b すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。33 イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱(しか)って言われた。『サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。』34 それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。『わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。35 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。』」

マルコ福音書は3回の受難予告を伝えますが、いつも同じパターンがあります。

(A) イエスがご自分の受難・死・復活を予告する(31-32節前半 a)。

(B) 弟子たちはそれを理解できず、見当はずれのことを考えている(32節後半 b)。

(C) イエスは弟子たちに受難の道の意味を語り、同じ道に弟子たちを招く(33-35節)。

きょうの出来事はこれと密接に結びついています。8章31-35節が言葉による受難予告であったとすれば、きょうの箇所は「出来事による受難予告」と言ってもよいでしょう。

(3) モーセは律法を代表する人物、エリヤは預言者を代表する人物です。「律法と預言者」は旧約聖書の中心部分を表し、イエスの受難と復活が、聖書に記された神の計画の中にあることを示しています。なお、ルカ福音書はイエスとこの2人が話し合っていた内容を「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について」(ルカ9章31節)であったとし、この出来事とイエスの受難・死の結びつきをより明確に示しています。

ペトロが仮小屋を建てようと言っているのは、この光景のあまりの素晴らしさが消え失せないように、3人の住まいを建ててこの光景を継続させたい、と願ったからでしょう。しかし、この光景は継続するものではなく、一瞬にして消え去りました。今はまだ栄光の時ではなく、受難に向かう時だからです。マルコ福音書は、ここで弟子の無理解を描こうとしているのでしょうか(上記(B)の要素)。

(4) 雲は「神がそこにおられる」ことのしるしです。イスラエルの民の荒れ野の旅の間、雲が神の臨在のシンボルとして民とともにありました(出エジプト記40章34-38節参照)。雲の中からの声は、もちろん神の声です。「これはわたしの愛する子」という言葉は、ヨルダン川でイエスが洗礼を受けられたときに天から聞こえた声と同じです(マルコ1章11節)。洗礼の時から「神の愛する子」としての歩みを始めたイエスは、ここからは受難の道を歩むこととなりますが、その時に再び同じ声が聞こえます。つまりここで、この受難の道も神の愛する子としての道であることが示されるのです。「これに聞け」の「聞く」はただ声を耳で聞くという意味だけでなく、「聞き従う」ことを意味します(申命記18章15節参照)。受難予告で「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(マルコ8章34節)と言われていたことと対応していると言ったらよいでしょう。これは上記(C)の要素にあたります。

(5) イエスの変容の姿は受難のイエスに従うよう弟子たちを励ますものでしたが、弟子たちは結局従うことができませんでした。イエスが逮捕されたとき、「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった」(14章50節)と、マルコははっきり書いています。受難予告を理解できず、最後までついて行けなかった昔の弟子たちをマルコは非難しようとしているのでしょうか。そうではなく、自分たちも同じ過ちを犯す危険があると警告しているのでしょうか。弟子たちは実際にイエスの死と復活が起こった後で、本当の意味で理解し、従う者となりました。わたしたちはもうすでにイエスの歩まれた道を知っています。そのわたしたちをイエスはご自分の道に招いてくださっています。今のわたしたちにとってイエスに「聞く＝聞き従う」とはどういうことでしょうか。